

報告Ⅰ・プラトンの技術観

小野木 芳 伸

古代ギリシアの代表的な哲学者の一人プラトンの場合、我々の周りの「自然」について積極的に語っているとは到底言えない。中後期にかけての対話篇のひとつ『パイドロス』で、ソクラテスは言う。「きみ、私のことをわかってくれたまえ。わたしは学ぶことが好きなのだ。土地や木々は私に何も教えてくれようとはしないが、町の人々はそれをしようとするのだ」(260d3e)。町の人々が本当に何かを教えてくれるかどうかはさておき、少なくともソクラテスの関心は所謂自然よりも人に向いているといえよう。

後期の対話篇『ソピステス』になると、(生命のあるものもないものも含め)自然の産物が神の技術によって作られるのに対し、人間たちがそれらから組み立てるものは、人間の技術によって作られるものとされる

(265a34)。すなわち、自然物も人工物も、ともに技術の産物として理解されている。さらに『ティマイオス』全体は、自然物全体を技術の産物として記述しようとする試みであると私は思う。

プラトンが自然を神的な技術の産物とみている以上、プラトンにおける「技術」を検討することは、プラトンが自然をどう理解していたかを知るための手がかりになるであろう。こうした期待の下に、ここでは主に『ゴルギアス』と『ピレポス』における技術観を取り上げることにしたい。

—

プラトンは初期の対話篇『ゴルギアス』で、いわゆる技術を「経験(エンペイリアー)」(462c3; 4; 6; 463b4; 465

a3) もしくは「迎合 (コラケイア)」(463b1:c1; 464a2)と、狭義の「技術」(464b3; 465b2)とに分けてゐる。迎合の術に属する技術としては、魂を対象とするものに弁論術、身体を対象とするものに料理法がある(465b3-5)。他方、真の技術に属するものは、魂に関わるものに政治術、身体に関わるものに体育術や医術がある(464b6-7)。

両者の関係についてプラトンはこう言う。「これら四つの技術〔「医術・体育術・裁判術・立法術」〕がありいつも最善を目指して、医術と体育術は身体の世話を、裁判術と立法術は魂の世話をしているが、迎合がこれに気付くと——知るのではなく当て推量するのだと言っておこう——自己を四つに分け、先の四つの技術の部門各々の下に入り込み、入り込んだ相手そのものであるかのようなふりをし、最善ということについて思慮せず、そのときどきの最も快いことによって無知な人々を釣って欺き、最大の値打ちがあると思われるに至っている」(464c3-d3)ここから、迎合の術というのは、真の技術が成立した後にいけばその模倣・墮落した形態として現われるということが読み取れる。

また、こうも言われる。「料理術を私は迎合と呼び、このような物は醜いと私は言う。……:……:というのも、迎合は最善ということを無視した快さを目指すからだ。迎

合は技術ではなく経験であると私が言う理由は、迎合は自分もたらず物が自分の相手にとって本性上どのようなものであるのかについていかなる理(ことわり)も持たず、その結果各々の事柄の原因を述べることができないからである。そして、私といえば、理(ことわり)なき物を技術とは呼ばない」(464e2-465a6)すなわち、狭義の技術が最善を目指し、対象の本性を知っていて、原因を言うことができるのに対し、迎合の術の方は快楽を目指し、対象の本性、原因の説明を伴わない。

このように、『ゴルギアス』では迎合の術と最善の技術の違いに関し、実際に強調されるのは善を目指すか快楽を目指すかという違いである。ところで、ソフィストのカリクレスは快楽と善が同一であると主張する(495a;b:d)。これに対するソクラテスの反論は、以下の通りである。第一に、人が善・悪の対や幸福・不幸の対においては、交互に一方を受け取ったり失ったりする(496b)のに対し、「渴いているときに飲む」というような欲望を満足させる際には、苦痛と快楽を同時に感じる(496e)のであるし、欲望が消える際に苦痛と快楽は同時になくなるのに対し、善いものと悪いものが同時になくなることはない(497c-d)。したがって、両者は別のものである(497d)。第二の反論は、無思慮と善が両立不可能である

(無思慮な人間を善い人と呼ぶことはできない)(497a)の
に対し、無思慮と快楽は両立可能である(無思慮な人間
も喜ぶことがある)(498b)という同意に基づく。そして、
最後にあらゆる行為の目的は善であり、快いことも善い
ことのためになすべきであり、快いことのうちどれが善
でどれが悪かを区別するのは技術を持った人であると言
って、ソクラテスは技術と善の関係に触れる(499e-500a)。
善すなわち快楽というカリクレスの議論は、ソクラテ
スによる技術の二区分、すなわち、快楽を目指す迎合と
善を目指す技術への区分を廃棄しようとするものであろ
う。すなわち、迎合が快楽を目指すというのはまさに善
を目指すことになるのだ、という解釈により、迎合も技
術の資格があると主張しようとするものといえよう。こ
れに対し、ソクラテスは快楽と善とを峻別することでこ
うしたカリクレスの目論見を防止していると思われる。
その際にソクラテスが利用するのは、カリクレスのよう
な快楽主義者であっても自分が或る形式で善の感覚を持
っていることを認めざるをえないという事実である。も
ちろん、何が善いのかを見分けることは、例えば諸々の
快楽のうちどれが善くどれが悪いのかを見極めることは、
(ソクラテスの言う)技術を持った者にのみ可能である
(500a)。けれども、幸福という善が(無条件的に)不幸と

いう悪と両立するということはけっして受け入れること
はできない、とか、無思慮な者を善い人と呼ぶことはで
きない、ということとはカリクレスも認めざるをえない。
とはいえ、ここでは技術のもう一つの条件、対象の本性
の知や原因の説明についてあまり詳しく説明されている
とはいえない。

二

ところで、プラトン最晩年の対話篇の一つ『ピレボス』
では、技術の成立過程(Cf. 16c)が語られている⁽²⁾。もっ
とも、これについてのプラトンの言葉は到底理解し易い
とはいえない。

「そのつど在ると言われるものは一と多から生じ、自ら
のうちに限定と無限定性を同族のものとして含んでいる。
「在る」と言われるものはこのように秩序づけられてい
るのだから、私たちは常にあらゆる物について、そのつ
ど一つの形相を立てて探求せねばならない——その形相
が内在するのを私たちは見出さだろろうから——。そし
て、それを捉えたなら、一つの形相の後には二つの形相
を——二つの形相があるとすればだが——二つの形相が
ない場合には三つあるいは他の数の形相を考えねばなら
ない。そしてこれら一の各々についてやはり同様にして、

最初の一が一にして多にして無限定であるということだけではなく、それが幾つかを見るまで考察せねばならない」(16c9-d17)。

これに付け加えてまた、逆に無限多から始める場合もやり方は同じだとソクラテスは言う。「私たちに言わせると、人がいかなる一にせよそれを攪むらば直ちに無限定の本性へ目を向けるのでなく、或る数に目を向けねばならないように、逆に人が無限定なものを最初に把握せざるをえない場合も、直ちに一へ目を向けるのではなく、ここでもやはり各々一定の量をもつ或る数へ目を向けて考察し、最後にすべてから一へ至らねばならない」(18a7-b3)^f

例としてプラトンは「文字」と「音楽」を挙げている。第一に文字について言うと、音声は口から出るものとしては、一かつ量的に無限である。文字について知るとは、その音声について一や無限を知ることによるのではなく、「幾つか」を知ることによる(17a8-h10)。これは無限定なものから始める場合であるが、伝説上の文字の発明者テウトは無限の音声のうちに母音・半母音・子音の各々が一つではなく多くあることを見出し、一定数を区別した。そして各々の数を数え、数えられた各々にもその総体にも「字母(ストイケイオン)」という名を与

えた。その上で、私たちのうち誰も一つの字母を全体とは別にそれ自体として学ぶことができないのを見た。そこで、この連関は一であり字母の総体を或る仕方ですべてにすると考え、これを字母全体の上にある一つの技術と認め、文法術と呼んだ(18b6-d2)。

第二の例は音楽である。音声は音楽においても一である。低音・高音・中間音を知ることが、音楽を知るために不可欠だが十分ではない。音の高低について、その間隔や区切りとなる音が幾つありどのようなものであるか、それらからどのような音階が生じるのかを知らねばならない(17b11-d2)。

以上の箇所については従来様々な解釈が提出され、未だ決着はついていないことを断っておかねばならない。以下に述べるのは、私の解釈である⁽³⁾。

△音楽▽を例にとると、まず「永遠に在ると言われるもの」とは、在るべき音楽の形式、喩えて言うなら(紙の上に描かれた現実の図形に対する)幾何学的な図形を意味する⁽⁴⁾。そして、△▽とは△音楽▽という統一性であり、△多▽とは音楽をなす多様な音である。また、△無限定▽とは音に関しては高音・低音といった程度における無限限な多様性を容れるもの(直線によって表さ

れるもの)を表し、△限定▽とは△音楽▽のような統一体を成す数的な秩序・数的な関係の総体を指す。

この方法に依って技術が成立する過程を音楽術について説明すると、音楽が在る場合に、音楽を成す全く無限定に多様な音声の中に高音・低音・中間音を区別することで、全く無限定に多様な音声の中に程度において無限に多様な面が見いだされ、さらにこの程度の中で二倍の高さの音や三倍の高さの音などが(おそらく琴の弦の長さなどに対応する)数的関係によって区別されることで音楽の要素となる音程が析出され、これら要素となる諸々の音が組み合わされてできる音が確かめられることになる。リズムに関しても同様な手続きで要素を見いだすことができると思われる。そして、△音楽▽はこうした要素が結合することで、すなわち、一定数の音階音やリズムが組み合わされることで生成すると理解される。あるいは、こうした要素の結合により生成するものが△音楽▽である。

この後プラトンは、善の三つの条件を挙げている。第一は完結していること(20d1)、第二は十分であること(20d4)、第三は(それを知る者すべてにとって(20d8))選ぶうるものであること(20d7-10;22b1)である⁵⁾。この三つの条件は、直接には、快樂の生活と思慮の生活のどち

らが善いかを決めるための基準として述べられる。すなわち、ただただ快樂を感じただけで、快樂を感じたという記憶を欠き、現に快樂を感じているのだという真の判断も欠き、未来の時間において快樂を感じるだろうという推論も欠いた生活は人間の生活というよりむしろクラゲなどの生活であり(21c1d1)「選ぶうる」生活ではない(21d3)。他方、ただただ思慮や知性や知識や記憶を持っているだけで、快樂も苦痛もまったく感じずに生活することも、「選ぶうる」ものではない(20d9-e3)。「選ぶうる」生活とは、快樂と知性・思慮の混合した生活である(22a1-3)⁶⁾。

この、快樂と知性の混合した生活が善であることの原因を求めるために、プラトンは再び音楽などの例に言及している。それによると、まず、存在者は△無限定▽ (アペイロン)、△限定▽ (ペラス)、△(△無限定▽)と△限定▽からの)混合体▽ (メイクトン)、△(混合の)原因▽ (アイティアー)の四つに区分される(23c-d)。

△無限定▽とは△より熱い・および・より冷たい▽
△より乾いた・および・より湿った▽△より多い・および・より少ない▽△より速い・および・より遅い▽△より大きい・および・より小さい▽ △高音・および・低音▽など、△より多く・および・より少なく▽を受け入

れるものである(24a-b; 24e-25a; 25c; Cf. 26a)。先に述べたように、私はこれを(直線で表現される)無制限の程度を容れるものと理解している。すなわち(再び△音楽▽を例にとると)、高温・低温の間に成り立つ関係である。これに対して、△限定▽は△等しさ▽や△二倍▽など、△無限定▽とは反対のものを受け入れられるとされる(25a-b)が、これを私は△無限定▽において△音楽▽という統一性を成す数的関係の総体であると理解する。

第三の△混合体▽は、△無限定▽に△限定▽を加えた時に生じる。たとえば、△高温・および・低音▽△速い・および・遅い▽という△無限定▽がある場合、△限定▽が出来ると同時に△音楽▽が成立する(26a)。また、△寒い・および・暑い▽において△無限定▽と△限定▽がうまく協力することで△季節▽という△混合体▽が生じる(26a)。私はこの△混合体▽を、音楽や季節などの統一性が、数的な秩序を持つ要素の結合によって実現されたものであると考える。つまり、先の△神々からの賜▽での技術の所産である。△音楽▽という統一性は、こうした要素が結合することで、すなわち、音階音やリズムが組み合わされることで生成したと理解されると考えられる。あるいは、こうした要素(音階音・リズム)の結合することで生成したものが△音楽▽である。また、季節とい

う統一性は、一年の(おそらく、天体の幾何学的な運動によって規定された)個々の季節が結合することにより実現されるものである。

最後の△原因▽は、生成する物(すなわち、△混合体▽)が作られる物であるのに対し、作る者であり(26e-27a)、さらに、作る者は導き作られる物はこれに従う(27a)。

こうした区分の後、快樂と知性を混合した生活は△混合体▽に属すとされ(27d)、快樂・苦痛は△無限定▽に属し(27e)、知性は△原因▽であるとされる(28c; 30d-e)。

ところが、これらの類は元來快樂と考慮とから混合された生活が善であることの原因を求めためのものであったのにもかかわらず、△善▽への言及はまったくない。代わりに△混合体▽は「美しい」と呼ばれる(26b-17)。もちろん、「善き生活」を最終的に規定するに当たって、「善の力は美の本性の中へ逃げ込んでしまった」(64e5-6)という言葉や、これに続く「善を美・釣合・真という三つの形相によって追求する」(65a1-2)という言葉に見られるように、△美▽と△善▽が密接な関係を持っていることは明らかである。けれども『ピレボス』のこうした言い方では、△美▽と△善▽を直ちに同一視することもできないように思われる。

ところで、『ピレボス』において△混合(メイクシス)▽

という言葉は二義的に使われている。一つは快楽と知性の混合という意味であり、もう一方は \wedge 無限定 \vee と \wedge 限定 \vee との混合という意味である⁽⁷⁾。けれども、前者の意味での混合した生活が善であることの原因を求めるときに述べられるのが後者の意味での混合であるから、二つの \wedge 混合 \vee は無関係ではない。実際、快楽と思慮とから混合された生活は、 \wedge 無限定 \vee と \wedge 限定 \vee とからの \wedge 混合 \vee という類に属すとされる(S9a)。したがって、 \wedge 限定 \vee に属するのは数的な関係であり思慮は \wedge 原因 \vee の類に属するのであるから \wedge 混合 \vee の二義性は否定しがたいものの、二つの混合は同じ場面を表現すると理解するのが妥当であろう。すなわち、思慮・知性が快楽・苦痛を始めたとする可感的なものにおいて現実化する場面である。先に善の秩序に照らして最善の生活とされた、快楽と思慮との混合から成る生活が \wedge 何であるか \vee を、思慮という原因に対する結果の面から述べたものが、 \wedge 無限定 \vee と \wedge 限定 \vee とから成立する \wedge 混合 \vee という類であると私は理解する。

以上の解釈に立つと、 \wedge 混合 \vee が \wedge 善 \vee と呼ばれることなく専ら \wedge 美 \vee と呼ばれるのも理解可能となる。四つの類が語られる動機が、快楽と思慮との混合から成る生活が善であることの原因を探求することにあつた以上、

優れて善であると呼ばれる資格があるのは結果である \wedge 混合 \vee というよりは \wedge 原因 \vee の方であろう。また、通例『ピレボス』と並んでプラトン最晩年の著作の一つとされる『ティマイオス』では、原因である製作者(デームイールゴス)の方は「善い」と言われるのに対し、結果である宇宙(コスモス)の方は「美しい」と言われている(S9a)。ここには、善である原因(すなわち、思慮・知性)の結果が美として現れるという考え方が認められる。

したがって、ただただ快楽のみを感じるといふ生活よりも快楽と思慮の混合した生活を選ぶということは、原因の面から言うとき快楽・苦痛の感覚に受動的に身を任せるといふよりも思慮・知性の行使を選ぶことであり、結果の面から言うとき単なる可感的対象よりも秩序のある状態の方を選ぶことである⁽⁸⁾。美しい結果を伴う善い原因のこうした働きを技術と呼ぶとすれば、プラトロンが肯定するのはこうした技術であろう。

註

(1) ドッズの解釈に従い、⁽⁹⁾ *techné* (α)は技術の扱
う対象、とりわけ医療の場合の患者を意味すると取る。
ただし、ドッズの示唆する ⁽¹⁰⁾ などの接続詞を付加する

ことはせず、テキストは写本のままで「に」として」(倫理的与格)と訳す。Cf. E. R. Dodds, *Plato Gorgias*,

Oxford, 1959, p. 229 sq.

- (2) 念のために断っておくと、私は先の『ゴルギアス』の箇所では単に技術と善の関係という問題提起がプラトンの中に見られることを示すに止め、『ゴルギアス』と『ヒレボス』両対話篇での「技術」を直接比較対照したりする意図はない。

- (3) 現代の解釈で最も有力なのはゴスリングの解釈であると思われる。音楽を例に取ると、 \wedge 神々からの賜 \vee が命じるのは、音の高低など、直線によって表される「連続体」である \wedge 無限定 \vee 上に、音楽的な調和を実現するような一定の音程を表す諸々の点である \wedge 限定 \vee を定めるといふ手続きである (J. C. B. Gosling, *Plato Philebus*, Oxford, 1975, p. 165 sqq.)

- (4) この「そのつど在ると言われるもの」は、また、「永遠に「在る」と言われるもの」と取る解釈もある。

Cf. Gosling, *op. cit.*, p. 88.

- (5) 20d7-10 には「選ぶうるもの」という簡潔な表現は現われず、「それを知る者すべてがそれを選び求めかつ自分の許にとどめておくことを欲して追求したり目指したりし、善なる物と同時に完成する場合は別とし

て、他の何物にも配慮しない」ということが善の第三の条件として述べられている。けれども、これら善の三条件を満たす善き生活が「選ぶうる」と呼ばれるのが散見される(21d3; 22b1; b5)ところからみて、第三の条件を「選ぶうる」と表記するのには問題はないと思う。

(6) ここでもやはり『ゴルギアス』におけるのと同様、快樂主義者でさえ持っているはずの何らかの善の感覚に訴える論法が見られる。

- (7) Cf. R. Hackforth, *Plato's Philebus*, Cambridge, 1958; first published under the title *Plato's Examination of Pleasure*, 1945, p. 52, n. 1.

(8) \wedge 限定 \vee を加えることで健康をはじめとする \wedge 混合 \vee が成立する際に、 \wedge 限定 \vee のない状態を神が「驕慢(ヒュプリス)」「悪(ポネーリアー)」とみなしたと云われている(26b7-8)。また、『ティマイオス』には宇宙の生成について次のような言葉がある。「神はあらゆる物が善く在ることを望み、力の点で取るに足りぬ物が存在することを望まなかったため、可視的である限りの物が静止しては定まりなく無秩序に動いているのを取り上げて、これを無秩序から秩序へと導いた。というのも神は無秩序より秩序の方があらゆる点で善いと考えたからである。」(Ti. 30a2-6)

(おのぎ よしのぶ 都立大学)